

イタリア北東部国境地域におけるフリウリ語・スロヴェニア語間の言語接触
Contatti linguistici tra il friulano e i dialetti sloveni nella zona sul confine orientale dell'Italia

山本真司

Shinji YAMAMOTO

0. はじめに 本稿では、アドリア海北岸地域、イタリア共和国国境沿いの地域における、ロマンス語とスラヴ語、特にフリウリ語とスロヴェニア語諸方言の言語接触を概観してみたい。ロマンス語学では、スラヴ語との接触と言うとルーマニア語が有名で、それに比べると、本稿で取り上げる地域は、ロマンス語学でもスラヴ語学でも話題になることが少ないようなので、ルーマニア語の場合とはまた異なった状況を呈しているこの地域を紹介し、そこにいくらかの考察を加えられればと思う。

1. イタリアのスロヴェニア語圏 イタリアでスロヴェニア語の行なわれる地域は、行政地域名¹⁾で言うと、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア自治州 Regione autonoma Friuli - Venezia Giulia の、トリエステ Trieste 県、ゴリツィア Gorizia 県、ウディネ Udine 県、の3つの県(それぞれ同名の市を県庁所在地とする)である。なお、同州のうちポルデノーネ Pordenone 県には、現在、スロヴェニア語地区は存在しない。

この地域には、少なく数えても、イタリア語、ドイツ語、スロヴェニア語、フリウリ語、ヴェネト系諸方言、の5つ²⁾の言語が存在する(しかもそれぞれの言語の場合に標準語のほかに複数の方言・変種が存在している事も忘れてはならない)が、本稿では、論をフリウリ語とスロヴェニア語の接触の問題に絞りたいと思う。

その理由としては、紙面の制約のほかに、何よりも、この2つの言語がこの地域特有のものであり、人口や分布域の点でも地域を代表するに相応しいことを挙げておきたい。この地方に存在するさまざまな地方語・局地的言語の中で、フリウリ語は一番話者の数が多く地理的分布も広い。また、この地方のスロヴェニア語方言は、フリウリ山間部の文化を特徴づけるものであり、かつ、スロヴェニア語諸方言の中でも独特の特徴を持つ、ユニークな存在である。

さらに、この2つの言語がローカルなものとして、言語接触の結果を比較的容易に反映しやすい状態にあるということにも注目したい。

国家規模の共通語が、比較的規模の大きい共同体の文化の担い手であり、標準化の長い歴史を経ている(ゆえに「標準語」でもある)ため、多少とも強い規範意識が働く。それとは異なり、地方語・局地的言語(しばしば「方言」と呼ばれる)の場合は、言語の変化も、より「自然な」(人為的な制御を受けない)動きに委ねられていることが多く、言語接触の影響を現わしやすいと予想される。

フリウリ語のケースは、まさにこれに当てはまり、多くの話者が書き言葉の習慣とは縁が薄い状

態が長らく続いてきた³⁾。フリウリ語の読み書きを学校で正規の科目として教え始めたのは 20 世紀も終わりに近くなってからである⁴⁾。

スロヴェニア語の場合は、もう少し状況が複雑である。スロヴェニア語標準語 knjižni jezik (直訳すると「本の言葉」の意味) の文化への参与の度合いが、県ごとに異なるのである。

トリエステ県およびゴリツィア県 (特に都市部) のスロヴェニア系住民は、古くからスロヴェニア本国との関わりが強く、標準語の文化にも積極的に参加してきた。多くの人々は、自分たちの方言のほかに、学校教育を通して多少なりとも標準語も身に付けており、日常的にこれを活用する。

それに対して、ウディネ県のスロヴェニア語域では、標準語との縁が薄く、もっぱらその土地ごとの方言が使われてきた。学校での教育言語は伝統的にイタリア語で行われてきており、少数言語としてのスロヴェニア語が教育言語として公認されたのは 1980 年代になってから⁵⁾ に過ぎない。

本稿では、ゴリツィア地区についてはごく付随的に扱い、主にウディネ県域を取り扱う。また、トリエステ県には、現在、フリウリ語の残っている地区は存在しない (つまり言語的・文化的にはフリウリ地方に入らない) ので、以下の考察の対象外となる。

2. スロヴェニア語からフリウリ語への影響 国境沿いの山岳地帯の幾つかの溪谷からなる⁶⁾、ウディネ県のスロヴェニア語地区は、ベネチーア地方 Benečija または Beneška Slovenija と呼ばれる。数世紀にわたってヴェネツィア共和国に属した後、成立して間もない統一イタリア王国に併合された。そのため、イタリアとの文化的・言語的結びつきが強い。ここでは、社会的には、フリウリ語がスロヴェニア語 (諸方言) よりも強く、社会的威信が高い。言語的適応も「スロヴェニア語話者がフリウリ語へ」の方向が普通である。つまり、スロヴェニア人とフリウリ人の接触においては、スロヴェニア語話者がフリウリ語を習得して使用する、というのが普通であった⁷⁾。このような二言語併用を経て、村落全体がフリウリ語に移行してしまった場所もある。

そのような社会的な力関係を反映してか、スロヴェニア語からフリウリ語への影響はあまり強くない。同じくスラヴ語との接触が問題となるルーマニア語が、その状況の中で独特な形のロマンス語となっていたのに対し、フリウリ語は、一見すると、きわめて「普通の」ロマンス語である。または、典型的な北イタリア方言といっても良いかもしれない。そこでは、スロヴェニア語の影響を引き合いに出さなければ説明がつかないような現象は少ない。

それでも、スロヴェニア語の影響が全く目立たないわけではない。それは、特に語彙に現れる。まず、フリウリには、多くのスロヴェニア語起源の地名が確認されている。有名なものでは、Belgrado < bel「白い」+ grad「丘」、Gradisca < gradišče「砦」、Gorizia < gora「岡、山」、Samardenchia < smrdeč「におう、くさい」など。その分布は、つい最近までスロヴェニア語が行われていたことが知られている場所のみならず、それよりも広範囲にわたって分布している。特に、平野部には、中世に多くのスロヴェニア系住民が入植した⁸⁾ ことが知られているが、それらの村落は、今ではすっかりフリウ

リ語化してしまい、地名がその名残を示すのみとなっている。

また、フリウリ人には、スロヴェニア語起源の姓⁹⁾を持つ人も珍しくない。例えば、Noacco < Novak, Cerno < črn「黒い」、また -ç で終わる多くの苗字 Piericiç, Crapiç, — これは、しばしば、-iz, -izzo, -icjo (-icchio と書かれる), -is などのフリウリ語化された形で現れる (Gregoris, Gregoricchio, etc.)。

固有名詞ではない、普通の語彙では、Marchetti 1952 によるとフリウリ語には100個ほどのスロヴェニア語からの借用語があるという。その傾向を簡単に言うと、日常卑近な概念だが、生きていくのにどうしても不可欠というのではない語彙が多い。cos「籠」< koš, zave「ヒキガエル」< žaba「カエル」、colaç「菓子的一种」< kolač, govet「太った子牛」< govod「牛」、gubane「ケーキ的一种」< gubati「折りたたむ」¹⁰⁾。

いずれにせよ、人名・地名のような固有名詞も普通名詞も、これだけの数では、言語の構造と言う観点からは、ごく周辺的な問題を成すに過ぎない。言語の骨組みを決定するのにより重要な問題である統語論や形態論の問題に関しては、スロヴェニア語からフリウリ語に対する明確な影響を認めるのは難しいであろう¹¹⁾。

3. ゴリツィアにおけるフリウリ語とスロヴェニア語 早くから統一イタリア王国に併合されたウディネ県とは異なり、ゴリツィア県は、(中世末期から)第一次世界大戦期までオーストリア領に属していた。ドイツ語のほかに、イタリア語、スロヴェニア語、と複数の言語が学校教育の言語として認められ、住民は複数言語の日常を生きるのに慣れていて。

ゴリツィアでも、フリウリ語は学校教育の言語ではなかったが、豊かな文学を生み出してきた伝統がある。それに加えて、フリウリ語は、異なった言語を話す人たちの間での一種のリングア・フランカとして使われてきたことがあり、その意味では、よく知られた言語であったと言える。

このような複数言語使用の中で、フリウリ語はスロヴェニア語から、フリウリの他の地方における以上に大きな影響を受けた。スロヴェニア語からの借用語の中には、ゴリツィアに特有のものも少なくない。また、言語接触の影響が深く及んだ結果としてよく言及されるのが、ゴリツィアのフリウリ語は、フリウリ語の母音体系を特徴付ける母音の長短の区別を失なっているという事実である。

なお、今ではウディネ県に属しているカナル谷は、もとゴリツィア県に属していた。今でもドイツ語とスロヴェニア語の共同体が存在しているが、他の地区からの人口の流入およびスロヴェニア語教育を受けた世代の老齢化などにより、状況は変化しつつあるようである。カナル渓谷には、現在、イタリア語はもちろんのこと、ロマンス系(フリウリ語)、スラヴ系(スロヴェニア語)、ゲルマン系(ドイツ語)、とヨーロッパの3つの大きな言語グループがごく小さな範囲で共存する状態になっている。そのため、「3つのヨーロッパが会うところ」と呼ばれている。

4. フリウリ語からスロヴェニア語への影響 言語間の力関係から予想されるように、言語接触到に

については、実は、フリウリ語からスロヴェニア語への影響のほうが目立つ。

フリウリ語とフリウリのスロヴェニア語諸方言の接触について、総括的に扱った最初の研究は、ペッレグリーニ Giovan Battista PELLEGRINI のものである（Pellegrini 1972a [初出は 1969 年]）。これは、その後、個々の現象についてさまざまな研究が出た後も、参照すべき基本的な文献としての価値を失っていない。この研究は、フリウリ歴史言語民族地図 ASLEF の調査の一環として行われたものである。その意味で、ASLEF の解説書である Pellegrini 1972b もスロヴェニア諸方言について有益な情報を提供している。

以下、Pellegrini 1972a に基づいて、スロヴェニア語方言に対するロマンス語（フリウリ語）の影響とされるものを見てみよう。なお、ペッレグリーニが挙げていない場合は、比較・対照のために、スロヴェニア語について「方言形～標準語形」のようにして標準語形を、また、関係するフリウリ語については用例と簡単な解説を、筆者の判断で付け加えておいた。

(1) 音声上の影響

① e, ê, o の二重母音化 lieto～leto「年」, liepo～lepo「美しい」, poviedat～povedati「述べる」, sviyeti～sveti「聖なる」, nuoč～noč「夜」のような現象に言及しているものと思われる。また ē, ō>ej, ow の変化（トッレ溪谷のルゼヴェラ村 Lusevera の方言）にも触れている。

② ʌ（硬口蓋側音）> j ここでもペッレグリーニは用例を挙げていないが、kraljica～krajica「女王」, ljude～jude「人々」を補っておく。フリウリ語では、中世には gl で表わされる音が存在していて、これは [ʌ]であったと考えられているが、現代フリウリ語では [j] [i] に変化している。chiavagl「馬（複数形）>cjavai [kʲava:j]または[kʲava:i]¹²⁾

③ 語末において m > n priden～pridem「私は来る」。フリウリ語でもよく知られた現象である。PRIMUS > prin。ただし、ペッレグリーニも言っているように、寄生子音 p が生じることにより、これに支えられて m の音が残ることもある。HOMO > om ([omp] と発音される)「人、男」。

④ ɛ, ě の保存・拡張 標準スロヴェニア語には、硬口蓋破裂音は一種類 ɛ しかないが、この地域では、ɛ と ě の 2 系列存在する。後者は聴覚印象上は、日本語では「キャ」行音に似る。やはり筆者の判断で例を挙げておく。uoća, ćaća～oče「父親」, ěe～hoće（「望む」から、転じて、未来の助動詞として機能する：našo sarce to ěe se pouno poveseliti「私たちの心は…喜ぶだろう」), ćadena「くさり」。ɛ の存在は、フリウリ語の ej [kʲ]¹³⁾ の音（例えば CANE > cjan「犬」）の影響であるという。なお、類似の区別は、セルビア＝クロアチア語でも存在するが（cfr. スロヴェニア語 Gregorčič～クロアチア語 Muljačić），ただし、クロアチア語の ě は聴覚印象上ずっと日本語の「チャ」行音に近い。

⑤ g > ɣ > φ grlo > xarlo, ɣarlo > arlo「喉」～grlo フリウリ語には /h/ の音が存在しないために、スロヴェニア語でも、/g/ から移行してきた摩擦音も脱落する傾向があると言う。

(2) シンタックス上の影響

① **定冠詞の誕生** 標準スロヴェニア語には定冠詞は存在しないが、この地方の方言では、指示代名詞が限定を表わすのに用いられ、定冠詞のように振舞う。Kíri je te princípal naš prošim?「われわれの主な隣人は誰ですか」、ta černiela roža「ポピー」(文字通りには「赤い花」)、ta praua xoba「ヤマドリタケ、ポルチーニ」(文字通りには「本当の茸」)、ta liepa zvezda「明けの明星」(文字通りには「本美しい星」)。ペツレグリーニが挙げている例は、まとまった文脈を構成するような長い文章ではなく、短い語句がほとんどであるため、定冠詞のさまざまな用法の中でも、短い用例でもはっきりと認識可能なものがもっぱら取り上げられている。例えば、「太陽」や「星」のような「唯一物」をあらわすものや、「あるもの(物・者)一般」を現す用法など。

② **形式主語の代名詞 to** 天候動詞などの非人称動詞とともに用いられる。to sa posvače, to lampa「雷が光る」、to ruzinjà「小雨が降る」フリウリ語でも同じ現象が見られる(al lampe「雷が光る」のal)。

(3) 以下の現象は、スラヴ語=ロマンス語の混交による「自明な性質」の特徴である、とペツレグリーニは述べている。

① **中性の弱化** ② **名詞の曲用の単純化** ③ **双数の頻繁な喪失** これらは、ロマンス語には対応物を見出しえない現象が、スロヴェニア語のほうでも弱くなっていったと考えるのであろう。

④ **不定詞を使った否定命令 ni dešiderat**「望むな」これはフリウリ語の命令形(no sta/stait a + 不定詞)とは異なっており、むしろイタリア語に対応する。

⑤ **数字がフリウリ語のそれに置き換えられる** ペツレグリーニが挙げている、トッレ溪谷のプラディエーリス Pradielis 村の方言の形では、11 から上はみなフリウリ語からの借用語である。1 dan (m.) / dna (f.), 2 dvai (m.) / dvié (f.), 3 tri, 4 četjeri, 5 péet, 6 šest, 7 sédan, 8 ósan, 9 dévat, 10 déset, 11 undiš, 12 dodiš, 13 trediš, ...

(4) **語彙上の影響** ペツレグリーニは興味深い例として、レジア溪谷の方言の žižaladór という語を引き合いに出している。これは、フリウリ語 seselado「7月」からの借用語である。この seselado は、古い文献に記録されていたが、現在のフリウリ語では確認されてはいなかった。それが、スロヴェニア語に借用され、使い続けられてきていたと言うことである。

5. **研究上の問題** この種の研究でしばしば問題になるのは、やむを得ない面もあるのだが、議論が状況証拠に大きく依存している、という点である。つまり、両方の言語に似た特長がある、だから、一方から他方への影響であろう、という論である。しかし、一方から他方の言語への影響であると確実に言うにはこれでは本当は不十分で、反論の余地を残してしまうであろう。

まず、ここに挙げられている現象の幾つかは、フリウリのスロヴェニア方言に限ったものではない、という反論が提出され得る。例えば、指示形容詞の定冠詞的な用法は、カルニオラでも普通で、「ス

ロヴェニア語文学の父」と呼ばれたトゥルーバル Primož TRUBAR (1508-1586, 宗教改革者, スロヴェニア語で最初の印刷本を著し, また, 新約聖書と詩篇をスロヴェニア語に訳した) も用いていた。そして, このような場合 むしろドイツ語の影響を引き合いに出すのが普通である。

もちろん, ほかの地方にも見られるから, といって, この地方における同様の現象にロマンス語の影響が見られない, と結論付けるのは早すぎるが, そうではない可能性も否定できないことは念頭に置いておくべきであろう (ドイツ語の影響はスロヴェニア語圏ほぼ全域にわたっていて, ベネチア地方でもそれはごく古くから見られることを考えればなおさらである)。

また, 広く多くの言語に見出される傾向に関しては, 特に言語接触の結果とみなさなくても, 一般的な特徴の現象として生じたという可能性があるのではないか。例えば, 双数の消失はそのよい例である。双数が時代とともに失なわれていくという傾向はさまざまな言語に見られるし, そもそもスラヴ諸語の中でもこれを失っている言語のほうが多いのであるから。むしろ, 見方を変えれば, なぜこれがスロヴェニア語の (すべての, ではなく) いくつかの方言においては保存されたのか, ということこそが説明を要すると考えられるであろう。

確かに, かなり確実ともいえる状況証拠もある。例えば, *č* については, メルクー Pavele Merku がさらに別の証拠として, この音が残っている方言に関しては, 隣接するフリウリ語の方言でも *kʲ* が存在する (つまり, *kʲ* > *č* の変化を経たフリウリ語の変種と接触している方言では, *č* ではなく *č* を持っている) ということを挙げている。確かにこれは有力な証拠となり得るであろうが, それでも, メルクーが言うように「これ以上の説明は不要である」というのは言い過ぎであろう。

これらの現象の起きた原因を解明し, より確実に言語接触に起因すると結論付けるには, 言語構造の分析に基づく説明が必要であろう。個々の興味深い現象を逸話的に取り上げるのではなく, 言語の組織的な記述が求められるのである。事実, ベナッキオ Rosanna BENACCHIO, スピノツィ・モナイ Liliana SPINOZZI MONAI, ステンウェイク Hans STEENWIJK, ダピート Roberto DAPIT など, ペツレグリーニの後に続く世代の研究者の関心は, 正にこの方向へ進んでいるようである。

やはり構造を考慮に入れた研究が望まれるのが, 語彙に関する研究である。つまり, 珍しい単語だけを逸話的に扱うのではなく, 満遍なく語彙を収集・分類し, どのような種類の語彙が借用されたのか, そして, それらが取り入れられた言語の中でどのような位置づけを得ているか, を分析するということである。例えば, 「フリウリ語の, 頻度数で上位 100 番目までの単語の中で, スロヴェニア語起源のものは幾つあるか」というようなことが分かるような研究は, おそらくまだ存在しない。

なお, 借用語彙については, スクービッツ Mitja SKUBIC の詳細な研究 (Skubic 1997) がある。これは, 主に, 新聞・雑誌など (スロヴェニア語圏の他の地方ではあまり例を見ないが, この地方では, 新聞やコルポルタージュの文献では, 方言を書き言葉としても用いる) から多数の例を集めたものである。その量と種類の豊富さからは貴重な研究であるが, 雑然と集められた感があり, 何らかの形で

整理する必要がある。

6. 接触の緊密さの度合い フリウリ語の影響によると言われている現象の中には、単語の借用のように比較的簡単に起こり得るものもあるが、概して、これだけの影響を被るにはよほど強固な二言語使用状態があったと想定せざるを得ないのではないか。フリウリのスロヴェニア語話者は、みな、フリウリ語とのバイリンガルであったのだろうか。

ペッレグリーニは、ほとんど調査地点に関して、スロヴェニア語話者がみな流暢にフリウリ語も話すことをしきりに強調する (Pellegrini 1972b)。しかし、筆者が現地の人から聴いた体験談や、社会学的・民俗学的な文献から判断すると、状況は、村落ごとにまた個人ごとに異なるようである。

実際、スロヴェニア語地区からめったに出ないような生活をしている話者と、仕事などの理由で外部の人間との日常的な接触を余儀なくされている話者とは、おのずと違いがあるはずである。例えば、これは、村に残って家事や畑仕事をしている女性と、外に仕事に出かける男性、と言うような性別による役割の相違に結びついていることもあろう。また、自給自足が可能なだけの広さ・豊饒さを備えた土地を持っている村と、経済的な自立が不可能で、外との接触なしで生活していけない村では、状況も異なってくるであろう。

言語の構造の研究の他に、傍証として、話者間の接触の度合いを測るような社会学的・民俗学的研究が重要になってくるゆえんである。

7. 最後に 現在、ベネチアの人々のおかれている社会的状況は、かなり厳しい。山岳部の貧しい農村が多く、過疎の問題は深刻であり、既に消滅した村落もある。1999年に歴史的少数言語保護法が成立したとはいえ、長年にわたるイタリア語化政策のため若い人たちには言語の伝統が受け継がれず、スロヴェニア語が話せる人たちは高齢化が目立つ。

また、フリウリの諸言語を取り巻く状況も、この数年、大きく変わってきた。話者の数は次第に減少の一途をたどりつつある一方、フリウリ語は法律で認められた公用語となり、文学的な共通フリウリ語とそれに基づいた正書法が行政や学校教育に導入されつつあるため、フリウリ語は、もはや、必ずしも「自然な」変化のなりゆきに委ねられた言語とは言えなくなりつつある。

この劇的な変化の時期にあって、これからの経過を注意深く見守るとともに、失われつつある貴重な資料をできるだけ収集・記録することが、研究者の使命であろう。

注

- 1) 本稿では、地名は原則としてイタリア語形で統一した。
- 2) ほかに、近世以降に移住してきた、ギリシャ人、セルビア人、また、(特に第二次世界大戦後に)近接したイストリア地方から移住してきたクロアチア語との二言語使用者、などがいるが、これらは人数も少なく、居住範囲もほぼトリエステ市内に限られる。また、1980-1990年代以降に東

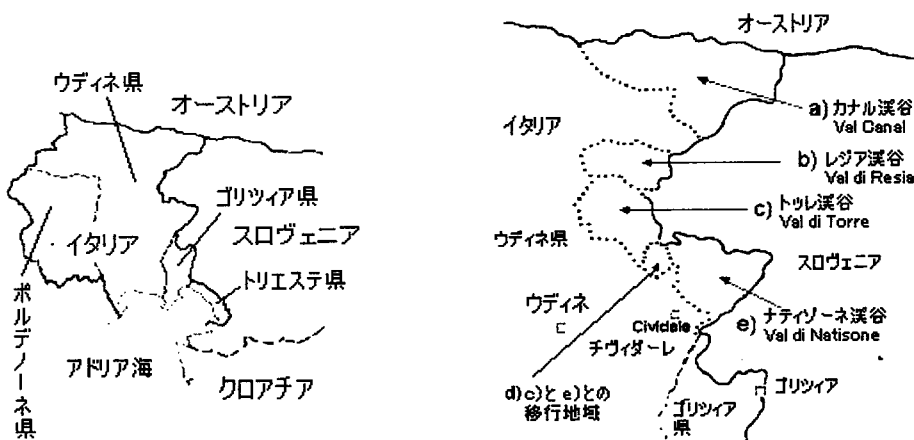
ヨーロッパやいわゆる第三世界諸国から移り住んできた移民は、決して無視できない数に上るが、その言語状況は、また別に扱うべき問題であろう。

- 3) フリウリ語に書き言葉の伝統が欠けていたわけではない、14 世紀にさかのぼる文学の伝統を持つ言語であるが、フリウリ語で書くという習慣は大衆の間に広まらなかったのである。
- 4) 1996 年の、フリウリ語の保護および育成のための州法および 1999 年の共和国法（歴史的少数言語保護法）による。それ以前には、フリウリ語の教育は、ボランティアの民間組織やカルチャー・センターなどによって行われてきた。
- 5) 1985 年にはナティゾーネ渓谷に建てられたスロヴェニア学校で幼稚園が、1987 年には同施設で小学校が開設され、程なくして同校はイタリア政府より公認された。
- 6) 谷の名称などに関しては、巻末の地図を参照されたい。
- 7) もちろん、今では、そのような場合イタリア語の使用が増えている。
- 8) これは、9 世紀後半から 10 世紀前半にわたる遊牧民族の進入によって荒廃してしまった村落に、時の総司教の招きに応じて、スロヴェニアから移住してきた人々である。
- 9) 正確に言えば、歴史的に古い（しばしば語源の知識がなければスロヴェニア語起源とはわからない）ものから、近い先祖がスロヴェニア系であったことが本人にとっても周りの人にとっても明確にわかるような、比較的新しいものまで、フリウリ人の苗字となった経緯の違いによって、さまざま種類のものを区別するべきところであろうが、ここでは便宜的に一括して扱っておく。
- 10) 生地を伸ばして巻き込んで（あるいはとぐろ状に巻いて）作るので、この名前になったものか。ただし、現在のスロヴェニア語では *gubana* ではなくて *gubanca* と呼ばれる（-ca は縮小辞）。
- 11) 筆者は、スロヴェニア語話者が話す、語順などが「変な」フリウリ語に、フリウリ語話者が違和感を覚えたとの証言を聞いたことがある。興味深い話ではあるが、このような「変な言葉」が、フリウリ語の定着した変種と見なせるかは不明である（非母語話者による単なる「間違い」の域を出ないものか）。また、その具体的な例が何か記録に残っているかは、寡聞にして知らない。
- 12) フリウリ語の [j] と [i] の音の区別は、いまだフリウリ語研究上、未解決の問題である。
- 13) とりあえずこのように転写しておくが、フリウリ語の音 *cj* については、これが *prevelare* か *prepalatale* であるかで研究者の意見は分かれている。両者は聴覚印象上はよく似ていることが多い。あるいは、実際の発音には、この両方が存在するというのかも知れない。
- 14) もっとも、フリウリ語の語彙の研究も、ごく最近までは民族学的な方向へと偏っていたので、語彙をまんべんなく収集すると言う研究はごく最近まで行われなかった。1980 年代ごろには、フリウリ語の辞書には、「コンピュータ」はおろか、「冷蔵庫」も「自転車」も載っていなかった。

参考文献

- BENACCHIO, Rosanna, 2005, *L'influsso dell'italiano sulle parlate delle minoranze slovene del Friuli*, in BREU, Walter, a cura di, *L'influsso dell'italiano sulla grammatica delle lingue minoritarie. Problemi morfologici e sintattici*. Atti del Convegno Internazionale, Costanza, 8-11 ottobre 2003. Università della Calabria, STUDI E TESTI DI ALBANISTICA 17, pp. 93-110.
- BENACCHIO, Rosanna, 2003, *Zone di contatto slavo-romanzo in Friuli: i dialetti di Resia, Torre e Natisone*, in *SLOVENIA, un vicino da scoprire*, 80 Congrès de Societât Filologjiche Furlane, Lubiana, pp. 413-432.
- Centro Studi Nediža, 1978, a cura di, *Lingua, espressione, e letteratura nella Slavia italiana*, Quaderni Nediža 2, Editoriale Stampa Triestina, San Pietro al Natisone – Trieste.
- Centro Studi Nediža, a cura di, 1978, *La storia della Slavia italiana*, Quaderni Nediža 3, Editoriale Stampa Triestina, San Pietro al Natisone – Trieste.
- Comunità montana delle Valli del Torre / Centro friulano di studi "Ippolito Nievo", a cura di, 1987, *Gente e territorio delle Valli del Torre*, 2a edizione.
- COURTENAY, Jan Baudouin de, 1998, *Degli slavi in Italia / O slovenih v Italiji*, a cura di Centro studi Nediža, traduzione italiana: Giuseppe Loschi, traduzione slovena: Martina Kafol, note introduttive su G. Loschi e J. Baudouin De Courtenay: Liliana Spinozzi Monai, note al testo: Živa Gruden, Cooperativa Lipa editrice, San Pietro al Natisone.
- COURTENAY, Jan Baudouin de, 1986, geordnet und übersezt von, *Materialien zur Südslawischen dialektologie und ethnographie. I Resianische Texte, gesammelt in den JJ. 1872, 1873 und 1877, Nebst Beilagen von Ella von Schoultz Adaiewski, (Vorgelegt am 19 August 1866)*. St. Petersburg, 1895 Photomechanisch Repro.–West Germany, Arturo Longhino- Arketöw, Val Resia / Grassau.
- DAPIT, Roberto, 1995, *La Slavia friulana. Lingue e culture. Resia, Torre, Natisone. Bibliografia Ragionata*. Circolo Culturale "Ivan Trinko", Cividale, Cooperativa "Lipa", San Pietro al Natisone.
- FRAU, Giovanni, 1984, *I dialetti del Friuli*, Società filologica friulana, Udine.
- KOS, Janko, 1992, *Pregled slovenskega slovstva*, Državna založba Slovenije, Ljubljana.
- LOGAR, Tine, 1992, *Slovenska narečja*, in LOGAR, Tine / RIGLER, Jakob, *Slovenija. Karta slovenskih narečij 1:500 000*. Geodetski zavod slovenije. Kartografski oddelek, Ljubljana.
- MARCHETTI, Giuseppe, 1952, *Lineamenti di grammatica friulana*, Società filologica friulana, Udine.
- MERKÛ, Pavle, 1987, *il dialetto sloveno del Torre*, in Comunità montana delle Valli del Torre / Centro friulano di studi "Ippolito Nievo", op. cit., pp. 179-181.
- MERKÛ, Pavle, 1976, *Le tradizioni popolari degli sloveni in Italia. Raccolte negli anni 1965-1974. / Ljudsko izročilo slovencev v Italiji. Zbrano v letih 1965-1974*, Trst, Založništvo tržaškega tiska / editoriale stampa triestina.

- PELLEGRINI, Giovan Battista, 1972a, *Contatti linguistici slavo-friulani*, in *Saggi sul ladino dolomitico e sul friulano*, Adriatica editrice, Bari.
- PELLEGRINI, Giovan Battista, 1972b, *Introduzione all'Atlante storico-linguistico-etnografico friulano (ASLEF)*, Istituto di glottologia dell'università di Padova / Istituto di filologia romanza della facoltà di lingue e letterature straniere di Trieste con sede di Udine.
- PELLEGRINI, Giovan Battista, 1975, *Sul dialetto e sulla toponomastica della Val Natisone: a proposito di contatti linguistici slavo-friulani*, in *Saggi di linguistica italiana. Storia struttura società*, Boringhieri, Torino, pp. 462-478.
- PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista, 1992, *Nuovo Pirona. Vocabolario Friulano*, 2a edizione, aggiunte e correzioni riordinate da Giovanni Frau, SFF, Udine.
- RIZZOLATTI, Piera, 1981, *Elementi di linguistica friulana*, Società filologica friulana, Udine.
- SKUBIC, Mitja, 1997, *Romanske jezikovne prvine na zahodni slovenski jezikovni meji*, Znanstveni Inštitut Filozofske fakultete (Razprave Filozofske fakultete), Ljubljana.
- SPINOZZA-MONAI, Liliana, 1998, *Tra gli sloveni del Friuli sulla Scia di J. Baudouin de Courtenay*, in "Slavica Tartuensia" IV, Tartu, pp. 276-288.
- STEENWIJK, Hans, 1992, *The Slovene dialect of Resia*, San Giorgio, Editions Rodopi B.V., Amsterdam – Atlanta, GA.
- STRANJ, Pavel, 1989, *La Comunità sommersa. Gli sloveni in Italia dalla A alla Ž*, Editoriale Stampa Triestina, Trieste.



(1)フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア (2)ウディネ県のスロヴェニア語地区「ベネチーア」

Stranj 1989などを参考にして作成